

「くまもと文学

花と縁の散策」

文豪・文人の足跡(句碑・歌碑)を訪ねて

『くまもと文学・歴史 花と縁の探偵団』

1. はじめに

「緑のマイスター養成講座」で、市民緑化活動の企画案を種々意見交換するなかで、熊本に縁のある文豪・文人の足跡が文学資産として数多くあることに着眼した。

そして多くの文豪・文人のなかから**6人の文士**を選び、句碑や歌碑があるゆかりの地を訪ねて「くまもと花博」に県内外から来場される方々に**「文学から見るくまもと」**をアピールすることにした。

キーワードは「くまもと花博」から**「文豪・文人が愛でた花や緑」**として、タイトルを**「くまもと文学 花と緑の散策」**、サブテーマを**「文豪・文人の足跡（句碑・歌碑）を訪ねて」**に決めた。

またチーム名は、文豪・文人が愛でた花や緑は何だったろうか？の視点からメンバーそれぞれが、担当した文豪・文人の書物からはうかがうことのできない人間味を探ろうと**「くまもと文学・歴史 花と緑の探偵団」**を名乗ることにした。

2. 探偵団メンバー

*【添付資料1参照】

岡 本 勝 恵（徳富蘆峰担当）
永 田 クニ子（種田山頭火担当）
八 尾 優 子（林芙美子担当）
加 来 英 俊（安永露子担当）
宮 崎 裕 三（夏目漱石、中村汀女担当）

3. 実践活動内容

*【添付資料2参照】

「緑のマイスター養成講座」は、昨年7月から始まり新型コロナウィルス感染拡大の第5波、6波による中断等をはさんで、約8ヶ月のグループ活動となった。

また、11月から開始した市民緑化活動を実践する中で、全員集合の「探偵団会議」は2度開催した。

1回目は、11月1日、県立図書館と文学の散歩道、江津湖畔から山頭火が出家得度した報恩禪寺（坪井町）と味取観音堂（植木町）を探索。

2回目は、12月2日熊本市動植物園にて肥後六花、鶯宿梅、十月桜、カタルバ、シマトネリコ、コブシなど、みどり豊かな自然の育みと「天然記念物スイゼンジノリ」を清らかな湧水で生育し復活させる栽培（養殖）をみた。

事後、それが文豪・文人が愛でた花やみどりを**「花とみどりの散歩道」**にまとめた。

4. 活動の振り返り

※【添付資料3参照】

この市民緑化活動を通して、熊本にゆかりある文豪・文人の文学資産を学ぶことは、「文豪・文人という固定概念や仕切りをとりはずし、花やみどりを愛でた感性に思いを巡らしてみる。そしてそこにくまもとの魅力を再発見できた」こと。

もう一つは、「くまもとのみどり豊かな美しい自然との共存・共生を継承していく」こと。

以上のこととは、探偵団員それぞれが文豪・文人にゆかりのある場所などを自らの目線で探索して得た有意義な成果と言える。

5. 終わりに

※【添付資料4参照】

「第38回全国都市緑化くまもとフェア」（くまもと花とみどりの博覧会）は、日本最大級の「花とみどりの祭典」で、熊本では昭和61年に開催された「クマモトグリーンピック'86」以来、「36年ぶり」2度目の開催と聞いた。

「くまもと花とみどりの博覧会」の成功を祈念して「くまもと花博」をイメージした押し花のしおりを作った。

また、ここに発表した花とみどりは、感性豊かな文豪・文人が愛でた花やみどりの極々一部であることを補足して「緑のマイスター養成講座」の受講報告とする。

【添付資料】

1. 探偵団メンバー全員集合写真（於：江津湖畔の中村汀女句碑前）
2. 【花とみどりの散歩道】
 - 徳富蘆峰（民友社文学の総師）
 - 種田山頭火（漂泊の俳人）
 - 林芙美子（昭和時代の女流作家）
 - 安永蘿子（みずあかりの歌人）
 - 夏目漱石（明治の文豪）
 - 中村汀女（ふるさとと母を愛し うたい続けた女流俳人）
3. 市民緑化活動の振り返り（市民緑化活動の実践と成果）
4. 「くまもと花とみどりの博覧会」をイメージした押し花しおり



『くまもと文学 花と緑の散策』文豪・文人の足跡（句碑・歌碑）を訪ねて

担当者：岡本

民友社文学の総師
徳富 蘇峰

生まれ地
熊本県水俣市

1863年1月25日(父一敬
母久子 5番目の子前「猪一郎」)
1957年(昭和32年)亡くなる 94歳

書くことを一生の仕事に

徳富記念園 熊本市中央区大江
〔熊本市文化財指定〕

〔植物〕 西洋梓樹(カタレバ)

アメリカヤナギ。アメリカウセンカズラ
花実 6~7月
11月

小きい頃から
庭にあつた円椎
が好きでした

老木になつても
樹皮が裂けず
葉はやや小くて
薄(ほんぱ)い(びんぱ)い)も
小さい。

円椎(ツブラジイ) 别名:コジイ
ブナ科 常緑樹 高木



「猪一郎」

カトレバの花 5月中頃に白い花が咲く。
新島先生からおくり来たカトレバの種から育った木。



2021年1月

『くまもと文学 花と緑の散策』文豪・文人の足跡（句碑・歌碑）を訪ねて

漂泊の俳人 種田山頭火

(1882~1940年)

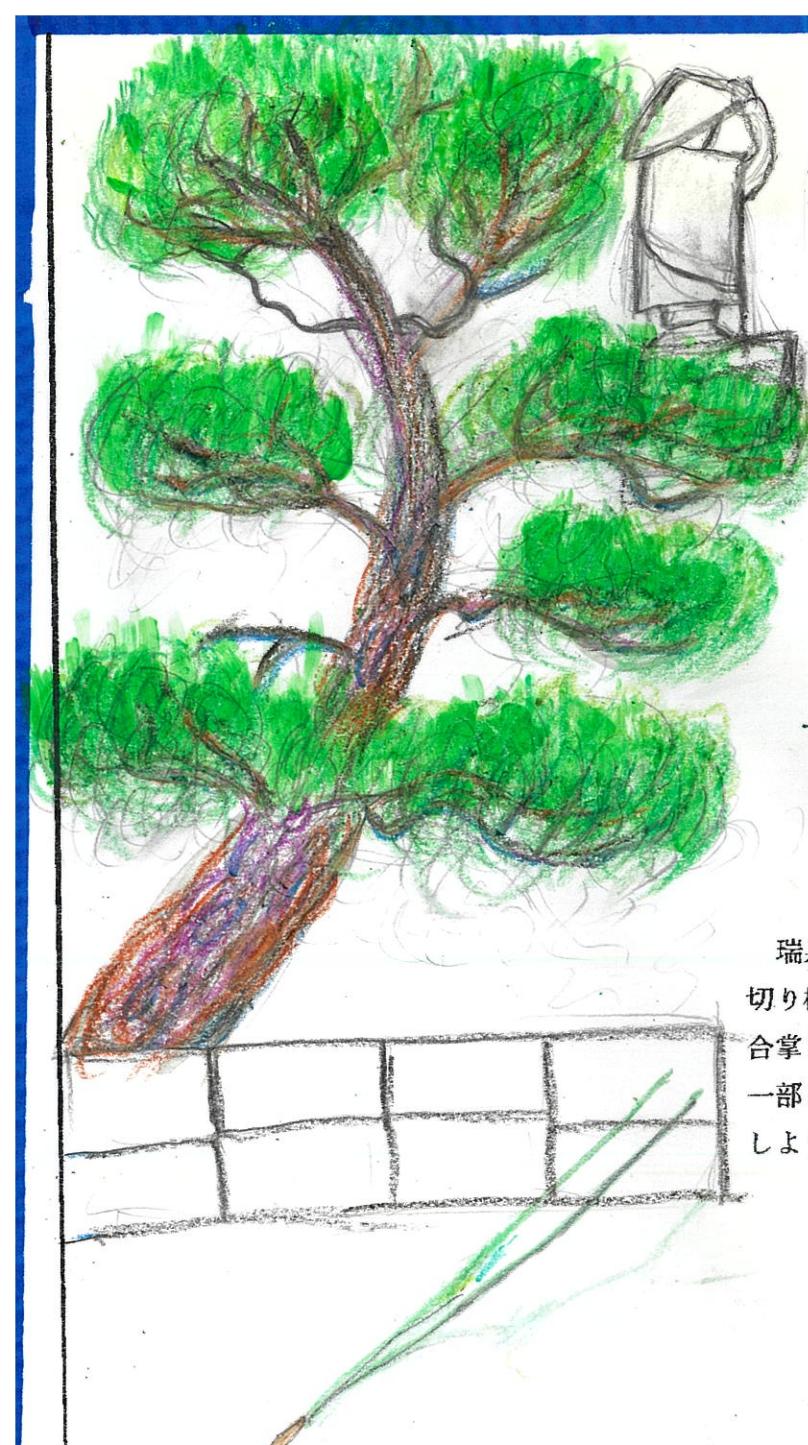
報恩寺（中央区坪井）で出家得度した山頭火は、大正14年2月北区植木町見取の見取観音堂（瑞泉寺）の堂守となり、托鉢と勤行の独居生活1年2ヶ月。

松はみな

枝垂れて

南無観世音

瑞泉寺参道の両側に赤松の枝が両手をさしのべるように枝垂れていたそうだが、現在は切り株が少し残っているだけである。自分が観音経を誦経すれば、松はみな枝垂れて、まるで合掌しているかのようだ、と単なる比喩表現ではない。山頭火の句作する態度は自己を自然の一部としてみると共に自然を自己のひろがりとして観ると日記にも書き、自己と自然を一体化しようとする態度には一貫したものがあった。



『くまもと文学 花と緑の散策』文豪・文人の足跡（句碑・歌碑）を訪ねて

昭和時代の女流作家

林 芙美子

句碑「旅に寝て のびのびと見る 枕かな」

天草を訪ねて宿泊した 旧 岡野屋旅館(苓北町) に有

くまもと文学

「天草灘」

昭和25年

「舞姫の記」

昭和22年

電気館(新市街)
などの記載有

少女時代に、熊本に住んだことがあるといわれています

好きな花

「カルミア」(アメリカしゃくなげ)

林芙美子記念館(新宿)のホームページより

カルミア

ツツジ科

常緑低木

開花期

5~6月

花色

白 赤 ピンク



『くまもと文学 花と緑の散策』文豪・文人の足跡（句碑・歌碑）を訪ねて

みずあかりの歌人 安永 路子

大正9年（1920）～平成24年（2012） 92歳

熊本市御徒町（中央区安政町）出身

歌人、書家

宮中歌会始選者

熊本市名誉市民

毎日書道展 名誉会長

歌集 冬麗、魚愁、青湖 など

エッセー集 みずあかりの記、書の歳時記 など

書家 『春炎』の号

はなびらを幾重かさねて夜桜の
あはれましろき花のくらやみ



清正公銅像横のチハラザクラ（白色の花）

『くまもと文学 花と緑の散策』文豪・文人の足跡（句碑・歌碑）を訪ねて

明治の文豪

夏目 漱石

『木瓜（ぼけ）咲くや
漱石拙（せつ）を 守るべく』



○明治30年、熊本で英語教師をしていた
頃に詠んだ句

○漱石も木瓜の大ファンだった。

木瓜・・・中国原産のバラ科ボケ属の
落葉低木

番外編

正岡子規が漱石の結婚の際、詠んだ句
『蓁蓁たる 桃の若葉や 君娶る』

『くまもと文学 花と緑の散策』文豪・文人の足跡（句碑・歌碑）を訪ねて

今日（けふ）の風 今日（けふ）の花

中村 汀女

『つゝじ咲く 母の暮らしに 加はりし』

- 上江津湖対岸にあった生家から移転された句碑
- 昭和を代表する女流歌人で熊本市名誉市民
- 句集の挿絵に入れた好きな花

春は紅梅、夏は鉄線、秋は萩、冬は山茶花

（中村汀女 昭和58年発行「花句集」より）



ツツジ・・・ツツジ科ツツジ属の常緑樹

紅梅はバラ科サクラ属

鉄線はキンポウゲ科の落葉蔓（つる）

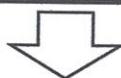
萩はマメ科ハギ属で秋の七草の一つ

山茶花はツバキ科ツバキ属

『市民緑化活動』の実践

1st time

2021/11/1



探偵団全員で



県立図書館と文学の散歩道
江津湖畔、報恩寺
味取観音瑞泉寺



句碑・歌碑を探索
夏目漱石、中村汀女
安永路子、種田山頭火他



文豪・文人らが愛でた花やみどりを
『花とみどりの散歩道』にまとめた

2nd time

2021/12/2

when
いつ

who
だれが

where
どこで

what
何を

how
どのように

探偵団全員で



熊本市動植物園



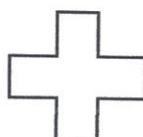
植物園内を探索
肥後六花、鶯宿梅、十月桜
カタルバ、シマトネリコ
コブシ他
スイゼンジノリの栽培



『市民緑化活動』の成果

熊本ゆかりの文豪・文人の
文学資産から学び、
くまもとの魅力を再発見

読書尚友（孟子）



くまもとのみどり豊かな
美しい自然との
共存・共生を継承

環 境 共 生



資料